郭上海主子全集

第Ⅱ期　第八卷　日記8

郭沫若全集

江苏工学院图书馆
藏书章

第Ⅱ期　第八卷

岩波書店

野上彌生子全集
第II期 第八巻
第十二回配本
（全二十六巻）

一九八七年一〇月六日　発行

定価三九〇〇円

著者　野上彌生子（のがみやえこ）
発行者　緑川亨
発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三-二二五-四一一一
振替 東京六-二六二四〇
印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上素一 1987　Printed in Japan
ISBN 4-00-091158-9

日記

八

目次

昭和十八年……一
昭和十九年……一八五
昭和二十年……四九四
後記……五八九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

昭和十八年一月一日　金　曇微陽のち晴

今朝は燿三の技研の式が九時からあるので、そのまへに朝祝ひをするため六時半かつきりに起床、例年の如くおぞうにを祝ひ、Yは出掛け、父さんは書斎に、私は部屋にはいつたところである。すでに昨年になつたが三十日三十一日は朝からいつもの雑事に朝から夜まで働いた。すこやかで働けることはなにより有りがたい。さうして又父さんもYも健康で迎年されるのは有りがたい。貰つたり、ヤミの仲間入りで入手したりした牛肉や鳥肉は冷蔵庫につまつてゐる。玉子は数十のストツクがある。これは当節ではなによりの贅沢である。栗のカンヅメをあけきんとんも拵へた。玉子焼もどつさり焼いた。こんな中でもお口とりが出来あがつたわけである。しかし来年はどうだらう。誰がそれを知るか？　ただ一つ例年と違ふのは大根がほんの小さいのが四本しかなく、おうはんを見合せなければならなかつた。代りにけんちん汁を拵へたが、こんな事ははじめてである。しばらく放棄した書きものもつづけ度いが、しかし朝おぞうにを食べるとアタマが軽く動かない。

一月二日　土　晴

「蒙古の旅」の下巻読了。

一月三日　日　晴

今晩スキヤキで磯野を招いてあつたが、ふうちやんが急に風邪をひいて来られなくなつたとのことで、三枝子ちやんを招待する。西洋菓子を焼いてもつて来てくれた。文ちやんも来てスキヤキにおもちを入れてたべる。臼杵から菓子とどく。鎌次郎にたのんだもの。

一月四日　月　晴

昨夜のスキヤキで食べ過ぎたらしい。終日ふさつて静養。それでも胃は痛まず、軽い下痢ですむのだから、よく〳〵私の胃腸は丈夫に出来てゐるらしい。

一月五日　火　晴

午後突然嶋中氏来訪。家政学校をやつてゐる城戸氏のことについて也。

引きちがへに宇野夫妻小さい息子さんをつれて来る。みんな気もちのよい人たちで、こんな親類をもつのはたのしい。からだがまだ本統でないが、どうにか調子はとり戻しかけた。

香月夫人から手紙。

一月十四日　木　晴

今日まで日記怠つた。執筆は緩慢ながらつゞけさへすれば六―七八枚の進度也。ムリをしないでのんきにやつてゐるためか身体の調子はよい。頭上から火の雨がふれば、もう書くのよむのと云ふことも出来なくなり、どうにかこのままの状態で行かれるなら、今の態度を変へずにすむのだから。

数日雪子（ママ）来訪。親類の二十五になる海軍の兵曹長が帰つて来ての話といふのをきいた。ガダルカナル島には日本二万、アメリカ五万の兵隊が河を挟んでゐる。日本兵は一と月も食べものがなかつた有様。やつと運んだサツマ芋を手にするとともに気がゆるんでパタ〳〵倒れるものがあつた。今は握り飯をやつと一人一箇あてぐらゐに運んでゐる。制空権を敵に握られてゐて、島に向ふ舟が片つぱしからバクゲキされる為也。この男は一等巡洋艦衣笠に乗つてゐた。まだ発表されないが衣笠は

爆撃されて沈んだ。戦死六十人余、バク風で艦長は立つたまま首がとんださうな。ミッドウェーの海戦はスパイで誘ひ出されたので、その時日本の航空母艦が四隻沈んだ。それが目下のソロモン附近の海戦を歩のわるいものにしてゐる。

十二日には放送した。「ことばと生活」放送ももうラクラクとやつてのけられる。ただ自由に話すことが出来ないのでそれだけが余計な気あつかひをさせて面倒臭い

十三日には吉田が帰つた。東京にゐれば田舎が、田舎にゐれば東京が恋しくなるのらしい。田舎ものの粗野と頑固を除けばなか〳〵の働きもので、正直でもあるのだから、ずつとゐてくれるとよいと思つたが、とにかく帰す事にした。ちつとも気まづい思ひなく、その日まできげんよく元気にやつてくれた。単衣でモンペと上衣をぬつておいてくれた。午後から岡田禎子氏、東満旅行の土産話、今日からは高橋一人だけになつたが、どうにかやつて行くらしい。これですめば経済的にもこの上なしである。

一月十五日　金　晴

午前執筆例の如し。父さんは学振で大学に行く。午後田中文ちゃん。津田と荻窪の入学試験がすんだ報告あり。とろろで晩御飯をいつしよにたべて帰る。おかかをカイタりいろ〳〵手伝はせた。朗子からも丁度手紙。洋子の死は結句彼らを精神的にむすびつけ直したらしい。ヘットが百目一円で買へるとの事。早速注文しよう。まへの田島氏の手で唐まんぢゆう九つ入手。先だつては小豆を四合だしてまんぢゆうが三十入手出来た。目下甘味は戸棚に幾種も充ち、その上玉子が百箇近くもあ

る。北軽からつぎ〳〵に送つて来るのである。一つ二十銭近くになるが、今としてはむしろ安い相場らしい。

中公の藤田氏も来訪。今度から中公のものとなつた「日本の子供」に文化史的にいろいろな世界の話を書いてくれないかとの事。四五月からの仕事になるらしい。

一月十六日　土　晴

一月十七日　日

一月十八日　月　晴

午後二時より大日本婦人会の会合にはじめて出掛けて見る。某侯爵邸を使用してゐることはきいて見(ママ)たが、金襖の広間に、田舎の村役場にあるやうな机や椅子が並んで事務所になつてゐる。今は枯れてゐるが、春にはさぞ美しいであらうひろい芝庭で玄米を特別なカマドで焚く。カマド屋の宣伝甚だ微により細をきはむ、まことに新式先代萩のママタキ也。

二庭の広間が会議室。庭を後にして坐ればホカ〳〵と日向ぼつこが出来る。議事は玄米食の普及その他、山高しげり氏稍一言居士式であるが、アタマのよい話し方をする。今晩は上海から帰つた大野さんと原田さんを御飯たべにょんである。バス中ょ来らず、新宿廻りで帰つた。丁度ウスキの田中送り出しのブリがとどいたが、魚屋にたのむ時間なく、湯どのにもちこみ、菜庖丁一本でとにかくおさしみとスキヤキに使ふだけのものを切りとつた。我ながら魚棚育ちなればこそとカンシンする。粘つとりとして美味無上也。

上海の周りには鉄条アミが張つてある。田舎からの米の密輸入を防ぐため。しかし数百人のものがどつと洪水のごとく殺到してそれをパスする。射殺されるが、ぢつとしてゐても餓死するのだから、どうせ死ぬならなにか食べて死んだ方トクと云ふものならん。

赤ん坊用に送つて貰つたネルサラシ代四十三円支払ふ。

一月十九日　火　晴

早朝穂積夫人よりの電話にて、磯野定次郎氏の急死を知る。午後市河さんと目白駅におちあひ、お悔みに行く。その時ぶりを少しあげ、ハムを頂く。

一月二十日　水　晴

午前宝生氏、能楽会の件。午後より寺沢夫人。これにもぶりを分け、又ハムを頂く、その他アマ酒もコップ一杯。

夜田中豊吉氏と文ちゃん来りてぶりのさしみとスキヤキにて食事。文ちゃん津田がパスにてまづ〳〵安心也。

豊吉君はます金(ママ)がわいて来る。今度は木造船の一方に専心する事になる。ひどい船を作らせられるらしい。

一月二十一日　木　晴

午後大島夫人。北軽の玉子を分け、もち、ほうれん草、ゴマ、鶏片脚抱(ママ)く。玉子の外にぶりと蓮根を返す。今夜もぶりのスキ焼、丁度中川秀秋氏が来合はせたので御馳走する。高橋はけつかう一人

でやつて行くらしい。モキと正子から手紙、和子の小シャシンが沢山はいつてゐる。だん〳〵可愛い子供になつて行く。

一月二十二日　金　晴

今日は磯野氏の葬式午後一時―二時、二時半から婦人会の生活文化部でなにか緊急の相談があると云つて来た。ところが昨夜、夜半にセキが出て、少し風邪ギミらしい。二三日まへコタツの火が少し熱過ぎ、汗が出たまま眠つて、夜明けに少し冷えたらしい。気分には変りないが、これで黒紋つきでハオリも着ずに外出すれば本ものになるに極まつてゐる。それで中止と決定。新女苑の為に書かされる『日露戦争の頃の思ひ出で』昨日からで今日すむ。そのあと先日から不安になつてゐた奥歯の治療に今井さんに出掛ける。このくらゐの事を遠方まで行く必要ないし、遠くなれば長つづきがしないに極まつてゐる。そのあと清雅堂に廻り、高橋の移動届けの事で打ち合せする。

一月二十三日　土　晴

今日は鑑賞会の能だが、外出がおつくうで不参。しかし先日から歯が一つわるく、しみて不快なので近くの今井さんに通ひはじめる。遠いと時間潰ぶしだし、長つゞきがしないから。

一月二十四日　日　晴

高田文ちやん来訪。今夜は青島から技研に来た吉田正雄君が食事に来る事になつたので、昼と夜との客は疲れ過ぎるので、昨日デンポオで断つたが、昨夜外泊してゐたとかで手順が狂つた。吉田君が技研に来たのはYのために大変よかつた。夜シチューにおむれつ。それに魚屋から久しぶりにマ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

グロのさしみが来て御馳走が出来た。

一月二十五日　月　晴

午前九時四十七分、旅行記の下巻の執筆終了　上巻ともには二千枚を越すだらう。長いあひだ根気よく書きつづけたものだ。これが旅行記でなくて、会心の小説であつたら一さううれしいだらう。しかし兎に角一段落ついた。午後から二階の六畳の日光を利用してキモノのセイリなどして暮らす。夜松岡さんの敦煌ものがたりをよむ。彼の書いたものでなく、スタインその他の著書から抜スイしたやうなものだから、おもしろい。しかし彼のペンはこんなものの場合でも品がなく、悪達者でよくない。

今夜はYは今泉さんの奢りで竹葉。新年号のザッシに、彼ら若いものの意見をとりまとめたやうなものを今泉氏の名まへで書いた原稿料をはたいたもの也

一月二十六日　火　晴レ、薄日

手紙の返事その他たまつてゐた事務を片づける。岩波に原稿渡す。桜井さんがさつきとりに来てくれた。書物になるのは五月頃だらう。それまで火の雨がふらなければ万歳だが……。

ウスキから父さんの靴の皮とどく。

二月一日　火　晴

朝高橋をつれ、大蔵の雪子のところへ野菜をとりに行く。畑仕事に出てゐた爺さんばあさんも帰つて来て、いつしよに昼食、と云つても私は出る時五もくを拵へて、高橋と二人分もつて行つたので

あるが、彼らはおぞう炊で、それも三杯づつと極まつてゐる。米が月に一斗から不足するのである。昼飯に帰つた洋一郎までそれだから、茶椀に山もり持参の五もくを分けてやつた。爺さんは今近くの土地を少し開墾して、来年は麦の二俵はとれ、その他の野菜、イモを順々につくつて、たべものだけは不足なくたべるやうにし度いと云つてゐる。

うちでも今までどつさり溜まつてゐたのでどうにか十分にたべて行けたが、これからは少し注意しないと不足になるかもしれない。帰りにニュース劇場によつて見る。つまらないものばかりであつた。ことにアメリカの真似をしてその百分の一の効果も出さない漫画には呆れた。

スターリングラードの南部で孤立して包囲されてゐたドイツ軍は、終に無電の発信所も破壊され、本国とのレンラクも杜絶してしまつた事が発表された。十一月頃から包囲され、だん〳〵その圏が狭められ、袋の鼠となつたらしい。二十万人ほどの運命は戦死しないものは捕虜になつたのであらう。英雄的行動が賞讃されてゐる。ただそれのみで、彼らをそんな窮死に陥れたマヅサについては少しも云はれてゐない。この夏はもう今明日にもスターリングラードは陥落するやうに云はれてゐたのに、それがすつかり逆になつたわけだ。ヒットラーももしフランスの方面ではじめあれほど成功しなかつたら、こんな下手な事はしないですんだであらうに。——

これは日本にも他人(ママ)の石として役立つものであらう。

二月二日　水　雪雨。

小学舘の謡曲物語をぼつぼつ書いてゐる。なんでも書いて見れば世話がやける。

欧米の旅の下の校正も出だした。
高橋がなか〳〵よくやつてくれる。これですめば一人女中の方が気もちはらくだし、ケイザイ的にも助かる。しかし夏のあひだの事にも備へなければならない。原田の細君からこの間電話で一人あるらしい事を云つて来たが……

二月十日　水　晴

四日が節分で、それ以来美しい春光がつゞいてゐる。もつとも七日の日はひどい風雨で、その明けの朝は目覚ましい霜柱が立つたが……
金次郎が来てゐて、今日午後一時過ぎの汽車でたつた。彼の上京とともにおきるざわ〳〵した空気は私の仕事をすつかりダメにした。一方にタメ息をつきながら出来るだけよくしてやりたい気もちが年をとるとともに一さう深くなる。彼が甘へられるのも私たちのところだけだ。
今日は雪子も来た。ナギリから持つて来たと云ふブリを片身もつて来てくれた。二尾姉といふ人がもつて汽車にのつてゐたら、どこかの奥さんが百円だすから一尾売つてくれとせがんださうだ。さう云へば先日田中から来たブリを魚屋に料らせたら、料理ちんは要らぬから二片三片貰ひたいと云つた。これも以前には想像されなかつたことである。
田中はいよ〳〵船をつくりはじめる。二百五十トンの船が二十五万円。当局は金はいくらでも出すからと云ふ調子で、工事にかかると三分の一の金をキールを据えるとそのあとの半分を、出来ると残金を支払ふ。まるで金が舞ひこんで来るやうなもの也。こんな有様を見ると、どんな美しい名前

を使つてもイクサは田中のやうな人間と、一方に先祖以来の家事もつゞけられない人間とを作るにすぎないらしい。

金次郎とともに餅や、玉子、小豆、大豆、サッカリン、ブリのかす漬カマボコなど到来。毎日ゼイタクに豊富にたべてゐる。こんなものに対して返礼が今の東京では殆んど出来ない。いつか中公の五十年記念にもらつた大観署名のふろしきと、百穂の法事のお返しの、それも百穂署名の柏の画のあるのをあげた。

昨日はのやが来た。たのんだ私の袷と、これもたのんだリュックザックをもつて来たのだが、これも大丸よりも金次郎に靴の皮など貰つた返礼にしよう。

ガダルカナルとブナの兵士はどこかへ移されたらしい。それを「転進」といふ文字を使つて今日発表してゐる。負けたことをもなぜ正直に男らしく発表しないのだらう。そのケチ臭さは決して民衆のこゝろあるものを悦ばせはしないだらうに。かうした小細工をやる人間たちから私たちは左右されてゐるのだと思ふと、ちよつとガマン出来ない。

ドイツも終に数日まへにスターリングラードを放棄した。二十万人の兵士が包囲されて、とり残されたのだ。ひどく英雄的な最後であつたやうに報じられてゐる。勧降を拒絶したのは事実らしいが、みんな死んだわけではなく、最後のものは捕虜にでもなつたのであらう。しかしドイツとしてはどこまでもその終末を美しい英雄詩にしなければならないのである。

二月十六日　火　晴

朝十時三十分の汽車で父さんは福岡へたつ。
一昨日は石油箱にあらゆる食料品をつめて出しておいた。大根ジャガイモ、モチ、パン、ミカン砂糖、カンヅメ、鰹節et et——今日の出立にもにぎり飯持参である。それに玉子を三十あまり持つて行つたし、貰ひもののハムも少し入れておいたから、行きついた時の食事にはことを欠がないですむ筈だ。——息子のところへ出掛けるにこれほどの用意が要る世の中である。

二月十七日　水　寒い曇

お昼頃岩波さん訪問。月曜日に市河さんが来て、栄ちゃんが舞鶴に行つた三日目に早くもおよめさん話をもちこんだ人あり、そんなわけで岩波さんの末子ちゃんのことを具体的にとりあげ度いと云ふ事で、その話で出掛けた。ところがつい最近岩波さんの一高からの親友の世話で満洲の住友の会社につとめてゐる人と婚約が出来たとの返事であつた。市河さんでは舞鶴にやつてくれるかと、それを心配してゐたのに、満洲へのよめ入り話に少しおどろく。水沢夫人が近ぢ上海に行くにつき手紙があつたので、平生さんところによつて見ると、外出中で一時間ほどすれば帰宅との事、大島さんによつて話してゐるところへみつ子さんから出掛けて来た。上海に行つたら大野さんにレンラクするやうにあらたにすゝめておいた。

二月十八日　木　晴

朝市河さんにデンワすると、いかにもがつかりした調子であつた。小林さんに来て貰ふやうお店にデンワする。早速来てくれたので、末子ちゃんのことを委しくきく、婚約者は種田虎雄氏の兄さん

の息子で、ラグビ(サツカー)の選手で、経済出の出来のよい青年との事。岩波さんではみんな乗り気ときく、私が昨日受けた印象にはちがつたものがあつたのであるが……　とにかく栄ちやんとはすつかり違つたタイプの人物にとつぐわけである。

おサトウ白と黒と少しづゝあげる。

のやが来て、ふとんのカヴァをつけてくれる。丁度都合がよいので林町に百合子さんをたづねる。みかん一箱もつて行く。帰りに道灌山の小鳥屋で昔ながらのヒヱと粟のヱサを見つけて五十銭買ふ。今後も買へる由、三越の小鳥部で今買つてゐるのは、なにか白い粉の中にヱタイの知れぬアヅキいろの小粒の穀類がはいつてゐるもので、なんともまづさうで小鳥がかあいそうであつたので、久しぶりに御馳走がたべさせられるとうれしかつた。あんな小鳥のやうな善良でつゝましく、求めるところなく、素直にしてゐる美徳は人間には中ゝ学びにくいものである。

二月十九日　金　晴

先日かつちやんがあんで来た和子のレギンスと上衣と帽子を客車便でだす。中に急ぎの手紙の返事を要するものをも封入。これらの毛糸はYが幼稚園時代にきてゐた毛糸のマントのお古の利用。私がずつと冬の間夜肩かけにして臥つてゐたのを和子にゆづつたわけである。

ドイツはロストフもハリコフも放棄した。東部戦線はすつかり新奇(ママ)まき直しの型となつてしまつた。これで思ひきつたセイリをしてまた春から夏の攻勢にそなへると、しきりにゲッペルスが宣伝をしてゐる。ヒットラーは殆んど影をひそめた工合になつてゐるのは何故だらう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.